

二〇二三年度

中世文学会春季大会

シンポジウム・研究発表要旨

シンポジウム「デジタル時代の本文校合」趣旨

司会 慶應義塾大学附属研究所斯道文庫 佐々木 孝浩

文献的批判はもちろん、文芸的研究を行うにしても、作品本文の正しい理解のためには、本文の比較と校訂、そしてあるべき本文の復原という、所謂校合の作業は不可欠であるといえます。そのことは変わらないにしても、デジタル技術の発展と関係者の地道な努力によって、膨大な文献の画像を容易に参照できるようになった現在、校合という古くて地味な作業も劃期を迎えています。

コピーや紙焼き写真を一つ一つ蒐集していた時代に比較すれば、大いに省力化したばかりではなく、高精度の画像を容易に見られるようになりました。本文校合とあわせて検討すべき、同筆異筆の書人や筆跡の確認、あるいは紙背文書などの判読などもデジタル化の恩恵に浴しており、注目すべき成果も生まれています。

今こそ、本文校合という営みの意義と方向性について、改めて問い直すべき時なのではないでしょうか。

本シンポジウムでは、日頃様々なアプローチから作品の本文との格闘を続けておられる三名の研究者をお迎えして、それぞれの専門とされる分野・研究の立場から、現在、そしてこれからの本文校合という作業が、如何にあるべきかという問題について、デジタル画像との付き合い方という視点も交えて、お考えを伺います。本文の揺れ、内容の増減について認識することは、中世にあっても、作者の意図を知り、作品の本質を考えるのに必要不可欠なことでしたが、とりわけそのことが尖鋭的に捉えられるジャンルである、軍記、漢籍、聖教から、新たな知見を示していただきます。そしてそれを糸口にして、会場全体で討論を行って、明日からの研究に活かせる知見を共有したいと思います。

デジタル資料の利活用―『曾我物語』の注釈作業を通して―

大妻女子大学 小井土 守敏

作品の注釈を試みていくために、本文校合は不可欠な作業である。可能な限り多くの伝本を見渡し、その異同を通して、先人が試みたテキストの「解釈」を知り、その妥当性の検証、あるいは、そのような解釈が生じた理由の検証を重ねていくことによって、本文が確定し、注釈が施され则认为している。

本報告では、報告者が近時手がけた流布本『曾我物語』の本文策定および注釈作業を通して、デジタル資料の利用の事例をいくつか報告したい。『曾我物語』という作品で言えば、ウェブ上で公開されているデジタル画像も多く、今年の三月に統合された国文学研究資料館による国書データベースで、画像が公開されている伝本は、四八件にのぼる。うち写本は一四本、刊本は三四本で、整版本ならば、ほぼすべての版を閲覧することができる。写本一四本には、真名本や真名本訓読本が含まれるが、仮名本の諸本展開において重要となる太山寺本や彰考館本については公開されていない。また、國學院大学図書館のデジタルライブラリーにおける武田本のように、所蔵機関によって公開されているものもある。こうしたデジタル資料の利活用の実際と限界について言及してみたい。

語釈、注釈についてはジャパンナレッジの『日本国語大辞典』や『国史大事典』、『大漢和辞典』等のコンテンツを利用し、『吾妻鏡』は国文学研究資料館の吾妻鏡データベース、『玉葉』等の史料は国会図書館デジタルコレクション、漢籍における中国哲学電子化計画のデータベース、仏典についてはSŌTŌ大蔵経テキストデータベース研究会が提供するデータベースが利用価値が高い。

成果の公開のあり方については、紙媒体に「固定」させることももちろん重要だが、翻刻資料などについては、第三者の利用に供するあり方も、検討されなければならないと考えている。

以上のような個別具体的な実践報告となるが、本シンポジウムの話題提供となれば幸いである。

漢籍における本文研究とその課題——『史記』 古写本をめぐる——

成城大学 山田 尚子

『史記』百三十巻は、古く日本に受容され、平安期には大学寮紀伝道の教科書として学ばれるに至った。他の漢籍に同じく、『史記』の伝本もまた、中国宋代に刊行され、後に朝鮮・日本でも流通した宋刊本系本文と、唐代以前に中国から日本に伝えられ、転写されて残存する唐鈔本系本文とに大きく分類することができる。『史記』の場合には、平安から鎌倉期の古写本として十数本が知られる。これら古写本の多くには訓点が施されており、それらによって、かつて『史記』の本文がいかに訓読されていたのかを具さに窺うことができる。古写本の中には、近年影印本の発刊や所蔵機関のデジタル画像公開などがなされ、以前よりも容易に見られるようになったものもある。また、本文校合という面で高く評価されてきた『史記会注考証』は、国会図書館デジタルコレクションなどで参照できる（『史記会注考証校補』は部分的に参照可能）。一方、南宋の紹熙より慶元初（一一九〇～九五）頃に刊行された、いわゆる黄善夫本（南化本『史記』と称される）は、三注（集解・索隱・正義）を備えた『史記』として初めて刊行されたものとして名高いが、平成八年～十年に古典研究会叢書（汲古書院）として影印本が刊行された。黄善夫本には藤原英房（一二九三～一三四八以降没）による書き入れが移写されており、その書き入れは平安朝以来の博士諸家による説が「師説」として引かれる点などにおいて貴重である（小澤賢二「南化本『史記』解説」など）。さらに、龍谷大学図書館には英房の書き入れ本の抄出本（『史記抄出』）も存するが、こちらは龍谷大学図書館のHPからデジタル画像を閲覧することができる。

こうした状況の一方で、これまであまり取り上げられてこなかった、古写本の断簡もまた、その存在が知られる。本報告では、如上の状況を整理しながら、写本の断簡も視野に入れ、本文や訓点、書き入れなどについて確認作業を行いつつ、そこから窺われる問題点について考えてみたい。

デジタル時代の本文校合―中世寺院のアーカイブズを題材に―

神奈川県立金沢文庫 貫井 裕恵

報告者が基軸に据える歴史学において、本文の確定、あるいは史料が成立する背景に迫るうえで、本文校合は重要な作業である。デジタルアーカイブが浸透しつつある現在、もはや活字史料だけでは研究が成立しないことは言を俟たない。

報告者は、中世東寺の寺誌である『東宝記』について、成立までの編纂過程と成立後の写本作成の営為から、僧侶の修学活動と寺院運営の関わりについて考察を進めてきた。具体的には、中近世に作成された写本を調査し、あるいは画像を入手して、それらを比較することで、本文を確定し、書写活動の場について検討を加えた。このなかで、僧侶の書承活動の実態を捉え、史料の編纂や継承の指向性を垣間みようとした。寺院という場において、僧侶のネットワークのなかで、テキストの書写、校合、編纂といった営為が繰り返され、中世寺院のアーカイブズが形成されていく。

また、日本中世のアーカイブズの大きな特徴のひとつである、紙背文書についても言及したい。近年、デジタルアーカイブにおいて高精細画像が提供されるようになり、これまで解読が困難であった紙背文書が居ながらにして活用できる素地ができつつある。紙背文書の裏面に書かれた典籍・聖教は、従来、おもに年次比定に際してヒントを与えるものとして捉えられていたが、デジタルアーカイブ技術の進展により、本文校合や筆跡判定が可能となり、私たちに新たな知見を提供してくれる。

近年、欧米圏に倣い、日本においてもデジタルアーカイブのWEB公開事例が増えつつあるなかで、こと仏書については、寺院に伝来するものが多くを占めることから、公開上のさまざまな制約を受けやすく、WEB公開が潤滑に進んでいるとは言い難い状況である。しかしながら、IIF (International Image Interoperability Framework) におけるSAT (大正新脩大藏経データベース) の活用事例などを通じて、仏書におけるデジタル上での本文校訂の活用方法を示すことで、仏書におけるデジタルアーカイブとの向き合い方について考えてみたいと思う。

奈良絵本『長恨歌』の成立―ライデン国立民族学博物館蔵本を中心に―

慶應義塾大学大学院生 宋 春暁

発表者は白居易と詩作をめぐる説話と絵画の関係を研究課題としている。中でも、日本の古典に多大な影響を与えた『長恨歌』は、中世には多くの注釈書が作られ、近世にはそれらを享受した奈良絵本絵巻も数多く見られる。すでに小林健二・山崎誠・石川透各氏による精細な研究があり、特に浅井了意『やうきひ物語』を粉本に作成された絵巻の存在が着目されて以降、諸本分類が進展し、現在では、やうきひ物語系・古活字本系・ライデン民族学博物館系・他の諸本という四系統が定説となっている。

このうち第三系統のライデン国立民族学博物館蔵『長恨歌』奈良絵本三冊（以下、ライデン本）は、同じ内容をもつ絵巻や絵入り本が多数存在するが、具体的な成立の様相については充分考察されていなかった。その中でも、安野博之氏（「清原宣賢自筆『長恨歌・琵琶行抄』の成立」国語と国文学、二〇〇三年）は、清原宣賢筆『長恨歌并琵琶引秘』（以下、宣賢抄）との関係に注目し、ライデン本上巻の一部の内容と中巻第一句の注釈とが宣賢抄の記述より複雑であることをふまえ、「宣賢自筆本がライデン本系統の注釈を大胆に簡略化していることが明らかで」「ライデン本系統の注釈が宣賢自筆本に先行する」と指摘された。また、両書の成立について、いずれも参考にしたという原『長恨歌抄』の存在が想定されて以降、宣賢抄がもとにした注釈を伝える資料として、ライデン本が位置付けられてきた。しかし、ライデン本の中・下巻には、宣賢抄よりも簡略化された内容が少なからず確認でき、両書の関係についてはなお慎重な検討を要する。

そこで本発表は、改めてライデン本の本文を精査し、その成立にこそ宣賢抄が重要な影響を与えた可能性を指摘し、さらには挿絵の制作に別系統の『長恨歌』の奈良絵本絵巻の図様が用いられていることを検証し、これまで不明な点が多いとされてきた奈良絵本『長恨歌』の成立について考える一助としたい、と思う。

吉田兼俱の『日本書紀』講釈と五山僧

北海道大学大学院生・日本學術振興會特別研究員（DC） 小田島 良

吉田（卜部）兼俱（一四三五—一五一一）は応仁の乱によって焼失した吉田神社を再興し、吉田神道を確立する一方、古典の注釈活動を行うなど、多岐にわたる活動で知られるが、その基盤となっていたのが『日本書紀』（以下『書紀』）の講釈であった。そもそも卜部家には、鎌倉中期にそれまでの『書紀』注釈を集大成した『釈日本紀』を著した卜部兼方が出ており、その学を継いだ吉田家は（日本紀の家）として知られていた。原克昭『『日本書紀』進講史・断章——『日本紀の家』盛衰記——』（『中世日本紀論考——註釈の思想史——』（法蔵館、二〇一二年）所収）に詳論されたように、兼俱は文明十二年（一四八〇）に後土御門天皇への『書紀』の進講を果たし、その成功により従三位から従二位へと昇叙された。このことが以降の吉田家の権勢拡大の足掛かりとなった。その他にも度々行われた兼俱の講釈は複数の聞書として残され、寛文四年（一六六四）刊行の『日本書紀神代合解』に収められるなど『書紀』注釈史上にも大きな足跡を残している。

兼俱の『書紀』講釈について、従来の研究では『釈日本紀』や『日本書紀纂疏』といった先行する『書紀』注釈書からの影響や、『神皇正統記』等を経由した中世神道説からの影響が指摘されてきたが、本発表では兼俱と同時代の五山僧からの影響に着目する。五山僧は兼俱の『書紀』講釈の熱心な聞き手であり、兼俱自身もまた彼らによる漢籍の講釈に参列していたことが明らかになっている。兼俱の『書紀』講釈には、蘭坡景菫・横川景三・月舟寿桂・景徐周麟・桃源瑞仙といった、当時の五山を代表する学僧・詩僧たちが集ったが、彼ら五山僧が関わった聞書類を分析することにより、兼俱の『書紀』解釈に五山叢林の教養であった禅や漢詩文が与えた影響の実態を解明する。

能〈鵜飼〉の改作と間狂言

法政大学大学院生・日本学術振興会特別研究員（DC3） 富山 隆広

能〈鵜飼〉は、榎並左衛門五郎の原作に世阿弥が手を入れた作品とされる。原作の内容や世阿弥による改作箇所想定、現行形態との関係などについては、すでに多くの見解が提示されている。本発表では、これまであまり着目されていない〈鵜飼〉の後場と間狂言の関係を中心として、世阿弥の改作時における本曲の構成について考察する。

〈鵜飼〉の後場は、鵜使いが地獄落ちとなる直前、かつて僧に宿を貸し、厚くもてなした「二僧一宿の功力」により一転、極楽へ送られる展開となる。僧に宿を貸したことが鵜使い救済の主要因なのだが、作品内では四段にて従僧がそのことを簡単に触れるのみであり、すでに指摘がなされるように、とってつけたような設定の印象がある。本発表では、里人が僧による宿の所望を拒絶する二段の間狂言に注目する。間狂言で宿の貸借を描くことには、二点の機能が認められる。それは、①従僧がかつての出来事を語る四段の展開に不自然さを与えない点、②僧に宿を貸す行為に対して鵜使いと里人という相反の対応をとる者を描く点である。とくに②の両者の対比は、宿の貸借のみならず様々な場面で描かれることを、七段の間狂言や他段の詞章から確認していく。こうした点をふまえて間狂言で描かれる里人は、鵜使い救済を正当化する存在として配置されていると指摘する。後場の展開は世阿弥の後補とするのが通説だが、その内容を支える間狂言もまた、世阿弥改作時に付加されたものと解せるだろう。間狂言を用いた改作の経緯については、作品の詞章だけでなく『音楽談儀』などの記事からも想定されることをあわせて示したい。

曲の構想と密接に関わる間狂言は「世阿弥自筆能本」の注記にもみえ、右の結論とも一致する。〈鵜飼〉と同型の間狂言が、後の成立とされる世阿弥作品にも引き継がれており、古作の改作過程で得た間狂言の手法が、世阿弥の作風確立の一端を担っていたことを最後に触れたい。

『大乘院日記目録』考―興福寺大乘院尋尊の記した「歴史」をめぐる―

愛知淑徳大学 塩山 貴奈

『大乘院日記目録』（以下、『日記目録』）は、一条兼良息である興福寺大乘院門跡尋尊（永享二年〔一四三〇〕～永正五年〔一五〇八〕）によって編纂された編年体の資料である。本書は、治暦元年（一〇六五）から永正元年（一二五〇）におよぶ記事を持つが、これらは大乘院に伝わる「日記」のたぐいからの抄出といわれてきた。明らかに歴史的事実と相違する記事も少なくないわけだが、そもそも本書は、何某かの事件について『日記目録』ではどう記されているか、といったように特定の出来事にたいする関心から参照されることが多く、記事の正誤は個々に指摘されるにとどまり、『日記目録』そのものの構成や特徴に注意が払われることは少なかった。

しかし、本書は、十五世紀を生きた南都の貴種が何を「歴史」とみなし、そして、その「歴史」をいかなる論理のもと、どのような資料から得ていたのかを探る格好の資料である。一条家という出自を考えても、大乘院門跡という立場を考えても、尋尊が入手・閲覧しえた資料は膨大な数にのぼったと思われる。それは、彼の日記（『大乘院寺社雜事記』）からもうかがわれるが、それらの中から、尋尊は何を是として過去の社会にかなる情報を得ていったのか。むろん、いつの時代の出来事なのかによって、また、それが何にかなる事柄なのかによって、尋尊が参照した資料はさまざまであっただろう。

そこで、本発表では、『日記目録』冒頭から尋尊の出生年（永享二年）までをひとまずの区切りとし、とくに、当該期の社会的出来事や貴族や武士にかなる記事に目を向ける。特徴的な記事の分析から、尋尊がどのような資料を参照し、『日記目録』の編纂にあたったのか、いかなれば、尋尊の歴史認識はいかにして形づくられていったのか、その一端を明らかにしてみたい。

伝宗砌筆「未詳（智蘊か）句集」跋文断簡

― 一条兼良撰の散佚連歌撰集『新玉集』に関する一資料 ―

日本大学 久保木 秀夫

架蔵の断簡に連歌師宗砌を伝称筆者とする、未詳句集の跋文とおぼしき一葉がある。文中に「連哥の御撰集」「新玉のえらひに入」「宝徳三年（一四五一）三月五日宗砌」といった記載があり、これは一条兼良撰の散佚連歌撰集『新玉集』に関わる資料と推断される。

『新玉集』については諸先学により、『竹林抄』『新撰菟玖波集』、また宗砌の『連歌愚句』といった資料から、宝徳二年（一四五〇）時には兼良による撰集作業が始められていたらしきこと、二条良基の未完撰集『玉梅集』を受け継ぐ企図があったこと、応仁元年（一四六七）にはすでに完成していたこと、全二十卷・一万句に及ぶ大規模撰集だったこと、あとは後花園天皇からの綸命を受けるばかりであったこと、ところが乱によって兼良の桃華坊が焼亡し、延焼は免れた文庫の蔵書もその後盗難被害に遭い、結果『新玉集』の原本自体も散佚し、世に出ず終いとなったこと、などが明らかとされている。

今回取り上げる断簡は、そうした『新玉集』の撰集資料たるべく編まれた、某人の句集の跋文（前欠か）に該当するものとみられる。より具体的には、宗砌と並び称された連歌師智蘊（蛭川親当）の「子の親元、甥の親忠」から、故智蘊の句集をまとめたため、「『新玉』の撰びに入など」しそうな句に合点を付けてほしいと宗砌に依頼があったといった内容と解説できそうである。そうした理解に基づきながら、なお不明な点の多い『新玉集』の撰集過程の一端につき、私見を提示してみたい。

また併せて、連歌撰集というものについて、応仁の乱中に成立した作品いくつかについて、同時期における諸人の動向や典籍書写について、等々の諸問題に関する発表者なりの疑問点・不明点をも提示して、専門諸氏からのご教示をお願いしたいと考えている。

相国寺大智院伝来の縄衣文殊像について——仏教儀礼における斎座の荘厳と什物

相国寺承天閣美術館 本多 潤子

臨済宗相国寺派本山、相国寺は京都五山の第二位に列せられる禅刹である。足利義満によつて創建され、今なお京都にその寺域を有している。応永元年（一三九四）の焼亡に始まり、度重なる火災によつて、焼亡、再建の歴史を繰り返した。本山および塔頭に伝来する什物も同様に、焼失と再構築の歴史が繰り返された。

現在相国寺本山の所蔵となつている什物には、箱に「大智院」と墨書されているものがある。記された相国寺塔頭、大智院は現在は廃絶しているが、相国寺第二世、春屋妙葩の塔所であつた。延徳三年（一四九一）には足利義視の位牌を安置する牌所にもなつている。応永三十二年（一四二五）八月十四日の相国寺炎上の際には焼け残つた数少ない塔頭の一つであつたが、天文二十年（一五五二）七月の火災では焼亡した。江戸時代には存続の危機を迎え、什物が本山預かりとなつた。この大智院旧蔵什物のうち、一部の作品は中世の相国寺の資料に登場する。それが縄衣文殊像である。

大智院伝来雪礪筆とされる文殊像は、『蔭涼軒日録』延徳三年（一四九一）二月廿三日条に登場する。その後も『鹿苑日録』、『西笑和尚文案』、『日用集』、『隔蓑記』、『参暇寮日記』など、中世から近世にかけて残された相国寺派の資料に記される。特に、乗拂などの仏教儀礼の記事から、儀礼空間の荘厳に用いられていた実態が明らかであり、宗教的な意義を有する。

また、寺外にも知られていた名宝であり、近世の名所図会にもその名が記される。そこでは文珠が「斎を喫す」と言つたという説話が付与されているが、その背景には相国寺内での行事との関連がうかがえる。つまり、乗払という仏教行事で斎座の荘厳に用いられたため、「食」に関する説話が付随するようになったのではないかと考えられるのである。文化財にまつわる説話は、実際の使用目的と密接に関連していることを、文殊像と所蔵寺院の記録から確認する。

月の景時 狂歌・俳諧からみる軍記享受の一側面

北九州市立大学 渡瀬 淳子

江戸前期、鹿苑寺の住持を務めた鳳林承章の日記『隔蓑記』は、後水尾院時代の宮廷文化を知る格好の資料である。この日記の慶安四年九月十三日条には、仙洞御所で月見の際、和漢俳諧が行われた記事があり、発句に「名ヲアケヨ月ノ景時二度ノカケ」とある。「二度の駆け」は言うまでもなく『平家物語』や『源平盛衰記』に描かれた一ノ谷・生田の戦いの逸話である。源氏方の武士梶原景時が敵陣に深入りした息子を助けに行くというよく知られた物語だが、月見の席で月と関係がなく秋に行われた戦いでもない生田の戦いの「二度の駆け」が詠まれたのはなぜだろうか。まずは九月十三夜の月見が八月の十五夜とあわせて「二度」目の月見であること、加えて「月影」との掛詞で洒落たものだろうと考えられる。そこで同時代の狂歌などにも目を転じてみると、「二度の駆け」はたびたび詠まれる題材であった。軍記をはじめとする物語類では、梶原景時はだいたい人を陥れる悪人として描かれ、歌舞伎などの演劇も概ねそのイメージを引き継いでいるが、狂歌・俳諧の中ではその印象は決して悪いものではないことも分かった。また、詩歌の中には「影」との言葉の縁以外にも月と景時を結びつける連想の糸があるように思われる。今回は『隔蓑記』の発句を手がかりに近世前期の詩歌の中の景時像を追うことで、言葉の縁がどのような連想で繋がっているかを解明し、中世以来の軍記物は近世でどのように享受されていたのかという大きな問題につなげてみたいと思う。